

区 分	課 程
-----	-----

論 文 の 和 文 要 旨

博士論文の題目：大学生アスリートの誇りの構造
—感情エピソードに着目して—

学 籍 番 号：217D09 氏 名：近藤 みどり

指 導 教 員：土屋 裕睦 教授

目標を達成し得る要因の解明は、競技スポーツにおいて重要な課題である。本論文では、目標達成行動に関する動機づけ研究への応用を目指して、大学生アスリートの誇りの感情概念を明らかにすることを目的とした。すでに海外では誇りの個人差を測定する尺度が開発され、スポーツにおける応用的知見が蓄積されつつある。しかし、誇りの経験はその国の社会的価値観や文化により差異があることが示唆されており、海外の知見を日本のアスリートに適用することには限界があった。そこで、本論文では出来事に対する個人の認知評価や、人間関係のあり方、あるいは社会的規範などによって感情が形成されるとする社会構成主義に立脚し、その代表的な研究手法である感情エピソードを用いて、次の3つの研究を実施した。

研究1では、日本の社会文化を反映した大学生アスリートの誇りの全体像を把握することを課題とした。自由記述 ($N=195$) により誇りの感情エピソードを収集して、1) 状況要素（どのようなとき誇りを感じるのか）、2) 事柄要素（どのようなことに誇りを感じるのか）、そして3) 人物要素（誰に誇りを感じるのか）の観点から整理し、各要素内で類似した記述をカテゴリーにまとめた。各要素の特徴をつかむため χ^2 検定を実施した結果、状況要素では「達成」が、事柄要素では「社会性」が、そして人物要素では「自己」が、最頻出カテゴリーであることが示唆された。さらに、各要素間の関係をコレスポネンス分析によって検討した結果、スポーツを通じて得た人間性や競技を遂行する上で経験した忍耐・努力については、自分に誇りを感じる一方で、輝かしい実績や活躍、アスリートとしての能力等他者と比較して有能であることに関わる事柄については、チームメイトに誇りを感じる傾向にあった（第II章）。

研究2では、誇りを感じる事柄の個人差を測定する特性誇り尺度の開発を課題とし、研究1で明らかになった事柄要素の記述を項目としたアンケート調査 ($N=463$) を実施した。因子分析の結果、特性誇りは他者の支援や応援、チームメイトとの仲の良さ等他者と良好な関係にあることに誇りを感じる「他者恩恵」、困難に耐え、目標達成

のために努力することに誇りを感じる「忍耐・努力」、その競技のアスリートであることに誇りを感じる「競技者アイデンティティ（以下、競技者 ID と略す）」、そして他者と比べて優秀であることに誇りを感じる「他者比較」の 4 因子構造であることが示唆された。次に、尺度の信頼性と妥当性を検討するため、自尊心、自己愛、グリットなどの心理特性との関連を確認したところ、先行研究と同様正の相関を示し、収束的妥当性が認められた。また、信頼性係数 α および再検査 ($N=153$) 信頼性は、十分な値を示した。尚、特性誇りの得点に性差は認められなかった（第 III 章）。

研究 3 では、感情語を用いた誇りの概念構造を明らかにすること、そして特性誇りの個人差によって誇りの感情体験に差異があるか検討することを課題とした。インタビュー調査 ($N=13$) で収集した誇りの体験に付随する感情語を調査項目とし、アンケート調査 ($N=482$) を実施した。因子分析により誇りの感情体験を分類した結果、「堂々とした」「力を感じる」「自分らしい」等、自分らしくある感覚を表す「本来感」、
「挑戦的な」「生き活きた」「勢いのある」等、失敗を恐れず、自信に満ちた感じを表す「効力感」、
「自画自賛の」「自慢気な」等、相手に対する優越感を得ることを目的とした自己肯定感の高揚を表す「優越感」、そして「やりきった」「解放感」等、望みが叶い、プレッシャーから解放された感情を表す「充足感」の 4 因子が見出された。次に、研究 2 の知見をふまえて設定した他者恩恵条件、忍耐・努力条件、競技者 ID 条件、他者比較条件で、4 因子の感情体験に違いがあるか検討した。分散分析の結果、「本来感」では、競技者 ID 条件で最も高いこと、「優越感」は、他者恩恵および他者比較条件で高く、競技者 ID 条件で低いことが示された。また、「充足感」は、忍耐・努力条件および競技者 ID 条件で高いことが確認された。これらのことから、特性誇りの個人差によって感情体験に特徴的な差異のあることが明らかとなった。（第 IV 章）。

本論文では感情エピソードを用いて、大学生アスリートの誇りの感情概念を、誇りの特性および感情語から検討した。その結果、北米での先行研究で明らかにされた 2 因子構造 (authentic and hubristic pride) とは異なり、誇りが多様な概念を有する感情であることが示唆された。中でも、他者からのサポートや良好な関係性によって生じる自己肯定感の高揚を示す概念である「他者恩恵」因子は、集団主義文化の特徴を持つ日本の特徴が反映された可能性がある。今後、本論文で明らかになった誇りの構造から、誇りの個人差が目標達成行動に及ぼす影響を縦断的に検討できれば、目標達成行動を促進させる誇り因子と、逆に後退させる誇り因子を明らかにすることが可能となるだろう。